

# 室町・戦国初期における

## 甲府盆地中央部の諸豪族

### 服 部 治 則

#### はじめに

新羅三郎義光の子孫が甲斐國に土着して、その勢力範囲を拡張していくにつれて、各代ごとに子弟を新しい領土に分封して、その地の名を苗字とさせ、勢力を益々拡大して行つたことは周知のことであるが、ここで室町・戦国初期に現在の甲府おおよびその周辺にいかなる苗字の武士が発展して行つたかを見たいと思う。

史料については、今後新しい発見のための努力を継続することが必要であるが、従来用いられているのは、『一蓮寺過去帳』および各種の甲斐源氏・武田氏系図等である。諸系図のうち、特に『円光院武田氏系図』は『続群書類從』などに入れられているいくつかの武田氏系図とは全然別の系統のもので、甲斐國のなかで作成されたものと思われ、参考にすべきものが多くある。

系図の類は作成の時代、製作者などの分析が肝要であって、系図の記載をそのまま信用することは危険な場合もあるが、参考にするとか手掛りにすることは許されてよい。なお、筆者が今までに見たものに、現甲府市内大津町（旧中巨摩

郡二川村大津）の慈恩寺藏、作成伝來不詳の甲斐源氏・武田氏系図がある。この系図の初めの部分は破れていて、一番右に見えるものは浅利与一義成であるので、普通の甲斐源氏・武田氏系図の黒源太清光の子の逸見太郎光長・武田太郎信義の兄弟の半分以下からが見えているものであろう。この系図の中では、武田氏直系は五郎信光以降が見ることができる。この系図は前述の円光院藏・武田氏系図と似た部分があり、円光院藏本と同じ系統のものか、あるいは円光院藏本を参考にしたものか、ということを検討する必要がある。さらに、円光院本と若干記載が異なる個所があるのは、円光院本からの誤写なのか、あるいは、最初から円光院本と違った記載をしていたものからの写本であるのかは、ここでわかつに明瞭かにすることができない。

また、玉諸神社蔵の『磯部家系図』も作成の年代等検討をするが、これにも武田氏に関係のある記載が多い。そのほかにも、今後、今まで発見されていない諸家の系図などが出て来るかも知れない。神社・寺院の記録や棟札、あるいは仏像の胎内銘など研究が進めば、新しい史料が発見されるることは言うまでもないが、以下の記述

は從来知られている史料を用いて、概観的に諸豪族を列記していくことにする。

武田氏系図で子弟が複数で出て來るのは、鎌倉期までを除くと甲斐守信武の子刑部大輔信成からで、殊に陸奥守信春の兄弟に下条刑部大輔氏信・布施滿春・栗原殿があり、布施氏から大津氏が分出する。安芸守滿信（信満）の兄弟には穴山修理大夫春信（満春）・吉田刑部大輔成春・伊豆守信繼（下条殿）・市部七郎信久があり、刑部大輔信重の兄弟には右馬助信長・仁勝寺殿・江草兵庫頭信泰・今井左馬助信景・巨勢村宮内大輔信賢・倉科治部少輔信広・山宮民部

（刑）

少輔信安があり、刑部大輔信守の兄弟に穴山兵部少輔（信介）・伊豫守基信（基経）・中務大輔賢範（下曾称）があり、刑部大輔信昌の子、五郎信繩の兄弟には彦八郎信恵（油川）・四郎綱美（岩手）・松尾次郎信賢（薩摩守）などがある。以上の中では、甲府盆地、即ち現甲府市周辺にいたのは、布施氏・大津氏・仁勝寺殿・今井氏・巨勢村氏・山宮氏・油川氏などである。系譜関係不明なるも小河原氏・極楽寺氏などもこれら何れかから分れたものではないかと考えられるのであるが、今のところ証拠となる史料はない。

## 布施氏

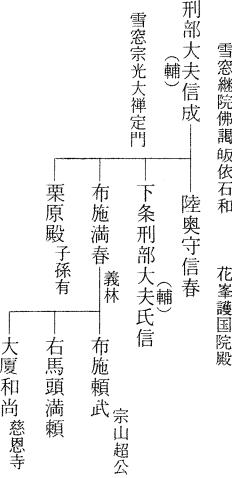
布施の氏号は現中巨摩郡田富町布施の地名によるものである。

慈恩寺藏武田氏系図には下の如く記されている。

布施彦六滿春は武田信成の三男もしくは四男で、法名を義林と称したことは諸系図に見える。

大津の法幢山慈恩寺（曹洞宗龍華院末）では応永年中（一三九四—一四二八）布施滿春が同寺を建立し、その三男大夏和尚を開山と

慈恩寺藏武田氏系図



したことになっている。

一昨年甲府市史編纂の途上発見された、甲府市後屋町（旧国母村後屋）の太平山勝善寺（臨済宗妙心寺末）の木造釈迦如来坐像の胎内墨書銘（『甲府市史研究』第二号、伊藤祖孝・秋山敬「勝善寺仏像調査報告」）に見える「法光賴武満春」は、法光は武田信成の法名、満春はその子、賴武は満春の子であり、法光（信成）—満春—賴武の系譜は、甲斐源氏武田氏の諸系図にも、円光院武田氏系図、慈恩寺武田氏系図にも見えるものである。満春は布施の地にて布施氏を称し、勝善寺のある後屋とは余り離れていない。信成も後屋に隣接する古上条の雪窓院（臨濟宗東光寺末）を祈願所としたといふ（『甲斐国志』仏寺部第七）。

布施滿春の長男賴武は法名宗山超公、布施氏を名乗っている。布施の万寿山法星院（曹洞宗欲盛院末）は丙申年（文明八年一四七六年）（あるいは応永二十三年一四一六年）正月布施賴武の開基と伝えている。布施賴武の弟滿賴は法名季照最公（『国志』）、右馬頭と系図に見える。

『一蓮寺過去帳』によれば、信成（継続院殿雪窓、当国守護、弥  
阿）は明徳五甲戌年六月十二日（一三九四）、信春（長福寺殿、甲  
斐守、当国守護、寿阿）は応永廿癸巳年十月廿三日（一四一三）の  
没であるが、没年齢は明らかでない。

大津氏

右の布施満春の三男が大夏和尚で大津の慈恩寺（寺記によれば明応六丁巳年開闢一四九七）の開山となつてゐるが、布施満春の二男

右馬頭満頼の子信清が大津氏を称している。大廈和尚と大津信清は叔父・甥の関係にある。信清の法名は長福寺殿天用<sub>（天明）</sub>□□。

鎌田八幡宮享徳四年乙亥（一四五五、七月二十五日改元康正元年）

「享德四年乙亥二月十九日手斲始。同三月十日柱立。八幡宮造當之次第勸進聖雪庭。」

六月十九日棟上。同八月十二日御殿入。  
大權那武田弥九郎信永。

同  
武田大津<sub>（芸州力）</sub>信清

享徳四年乙亥八月十二日本願敬白

『一蓮寺過去帳』には  
宣阿弥陀佛  
大津芸州  
七月廿二日打死

長阿彌陀佛 同弥七郎 同打死  
与河你佗拂 山亭右近助 同打死

移阿弥陀佛 同聰六 同打死

光阿弥陀佛 同七郎 同打死

同新九郎 同打死

王國中同作  
同樂之歌

與阿彌陀佛  
工七村式部丞

**喜阿弥陀佛** 同源三郎 同打死

卷之三

聲阿彌陀佛 極樂寺聰三郎

**敬阿弥陀佛  
井上治部丞  
同打死**

同打死

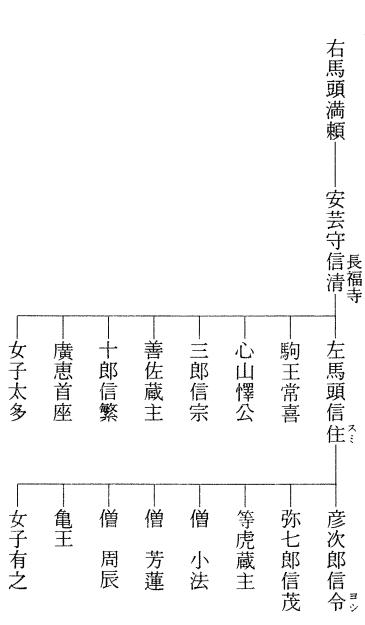
阿彌陀佛 河嶠大炊左衛門

純阿彌陀佛 河崎神左衛門 同打死

二、四月廿九日

といふ詰難があり同時に十二人の指

は系図の大津安芸守信清であり、延徳四年壬子（一四九二）は鎌田八幡宮棟札の享徳四年乙亥（一四五五）の三十七年後である。



である。延徳四年大津芸州と同打死の同弥七郎は安芸守信清の孫の  
弥七郎信茂であろうか。右の如く鎌田八幡宮棟札享徳四年の大檀那  
武田大津<sup>(芸州カ)</sup>□信清と、一連寺過去帳延徳四年打死の宣阿弥陀佛大津  
芸州と、慈恩寺藏系図の大津安芸守信清(長福寺)と、別々の史料  
に同一人物が三ヶ所に見えることになる。

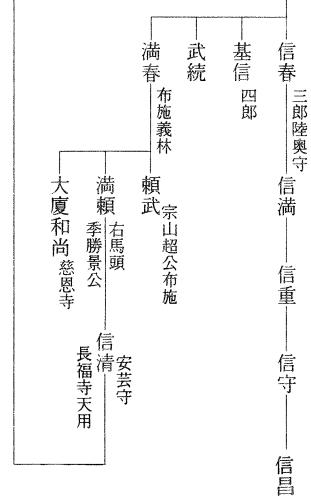
文安元年閏六月廿九日  
(文安三年五月)十九日  
(寛正二年頃、日付ナシ)  
(寛正二年文明元)  
文明十八年二月十日

因みに長福寺というのは中巨摩郡玉穂町中橋（旧中巨摩郡稻積村字中橋）の陽明山龍徳寺（曹洞宗歎盛院末）はもと長福寺と称したが江戸時代享保二年に諱を避けて龍徳寺と改めたという。己亥年正月鎌田兵衛尉（位牌に陽明院殿利山元亨大禪定門とある）の開基と伝えるが年代は詳かではない。

系図には信清の子には左馬頭信住のほか男子六人、女子太多があり、信住の子には彦次郎信令の外、弥七郎信茂ら六人の男子、ほかに女子がある。

（叔父に当る大夏和尚は大津に慈恩寺を開いた）の地を地盤として勢力を拡大したのであるが、延徳四年の合戦で大津芸州信清とその孫弥七郎信茂を同時に失い、大津氏にとって大きな痛手となつたことは想像される。この延徳四年（七月十九日改元して明応元年）の合戦は武田信繩が弟の信惠と戦つたものでこの年から甲斐国が乱国になつたと「妙法寺記」に記されている。同時打死十二名で、大津姓三人以外に、山宮姓四人、巨勢村姓二人、極楽寺姓、井上姓各一人、河崎姓一人も同時に打死しているのであるが、これら現甲府市周辺に地盤をもつ諸豪族は、信惠側に立つたものであろうか。

一本武田系圖



信住 右馬頭 信今 彦次郎 信經 兵庫助 八郎

### 円光院 武田氏系図

刑部大輔信成 雪窓 繼統院殿 奥州信春 花室護国院殿 安芸守満信 明庵長松寺殿

修理大夫春信 穴山殿 下条殿 布施殿満春 義林 刑部大輔成春 吉田殿 伊豆守信継 下条殿

栗原殿 布施殿満春 義林 七郎信久 市部殿 遠大西堂 觀音寺 法阿彌陀佛 一条聖人

心山懌公 駒王常喜 信茂 弥七郎 等虎藏主 小法 善普佐 藏主 信棟 三郎 慈恩寺 藏主 号仙溪 善普佐 藏主 信繁 十郎 周辰 芳蓮 亀王 女子太多

女子太多

女子太多

(註) 信經以下は他の系譜がまぎれ込  
んだ疑いもあるから注意が必要れ込

### 武田一流系図

刑部大輔信成 修理亮信春 信満

上野介基信

下條伊豆守 武春 (五郎、下條猶子 子孫有)

栗原甲斐守 武統十郎、栗原祖

布施彦六 満春 義林、大津等之祖

右の諸系図を比較すると、武田一流系図の布施彦六 満春の下、円光院 武田氏系図の布施殿満春の下には記載はない。慈恩寺藏 武田氏系図は一本武田系図とほとんど差異はない。但し、一本武田系図の信經以下は誤りの疑いが濃いのでこれを除いて、信住の官途名が左馬頭と右馬頭、三郎信宗と信棟、信令と信今、というように若干の差がある。

何れにしても、大津氏は芸州信清打死のあとも、子孫が続いていることを、右の二つの系図によつて知ることができるのである。

### 今井氏

今井氏については、筆者はかつて「今井兵庫助とその系譜」(『山梨大学教育学部研究報告』第二十九号、昭和五十三年)で若

干されたことがあるので詳細は省略して、ここでは慈恩寺武田氏系図と円光院武田氏系図との異同について見ることにする。

慈恩寺系図では今井兵庫助信經の兄弟に関する記載は円光院系図と同様であるが、信經の子は八郎信慶・大藏大夫信父。(輔)カタ弥次郎の三人の順序に兄弟となっているのに対して、円光院系図ではこの三人の前順序に左馬助信甫・左馬助虎甫の二人の兄弟が入っている。慈恩寺系図ではこの二人は大藏大輔信父の子になっている。また、慈恩寺では八郎信慶の子は逸見兵庫助信是・平三・源三の三人であり、円光院では信慶の子には、右の三人のほかにその弟になつている播磨守信意があるが、慈恩寺では、信意は信是の子、刑部右衛門虎意の兄となつていて、四郎信貞は両系図ともに播磨守信意の子である。なお、円光院系図では、信是の子、虎意の弟に、新九郎、武田越前守、與左衛門の三人があるが慈恩寺系図にはこの三人はない。

『甲斐国志』は円光院系図の信父を信甫・虎甫の弟として記しているところに疑問をもち、信父を信慶の兄として、信甫・虎甫兄弟を信父の子と改めているが、慈恩寺系図は、信慶・信父の兄弟の順は異なるが、信甫・虎甫を信父の子としているところは『甲斐国志』と同じである。

慈恩寺系図の作成年代は明らかではないが、『甲斐国志』の編纂以前に円光院系図と同系統の系図があつて、円光院系図が写し誤つたものを慈恩寺系図が正しく写したものか、或は慈恩寺系図が『甲斐国志』より後の作成で、円光院系図を根拠としているが、『国志』によって訂正したものか、その何れかであろうが、今のところ判断することはできない。

なお、円光院系図の平三の箇所に、「スハヨリ責殺ス。テウカ城

ニツカアリ」と記している部分は、慈恩寺系図は「諏訪ヨリ責殺ス。テウガ城ニ墓有」と記している。また前者には源三について記載はないが、後者には「谷戸」の姓を付けている。

平三・源三については、『一蓮寺過去帳』に、

是阿弥陀佛 武田平三 永正五己巳  
十二月廿四

与阿弥陀佛 侍者源三 打死

重阿弥陀佛 武田上条彦七郎 永正五己巳  
十二月廿四

金阿弥陀佛 龜千代 打死

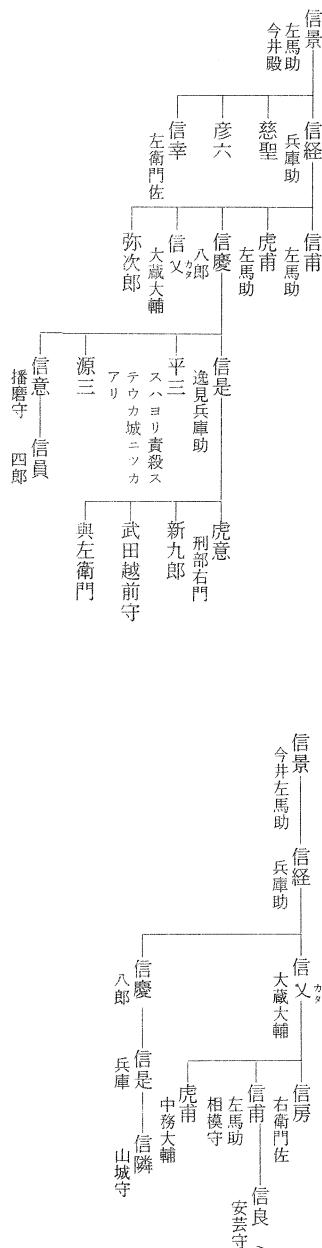
と見える、平三・源三と同一人と筆者は推定（ただし永正五己巳は永正六年己巳の誤りと考える）し、『高白齋記』永正六年己巳十月廿三日の「小尾弥十郎、江草城ヲ乗取」という事件と関連するものと推測した。テウガ城ではよく分らないが、テウガ城とすれば、ある

いは府衙城で若神子辺をさすのではないかとも考えられる。後考を俟つ。また、源三については、『玉諸神社神主磯部家系図』に現れるることは、『甲府市史研究』第二号にふれておいた。（龍淵齋＝武田太郎正清の父武田六郎正綱の長女、正清の姉が今井源三虎林の室となっている。また正綱の室は今井大藏大輔信成の女とするが、信成は信父と同人か。）

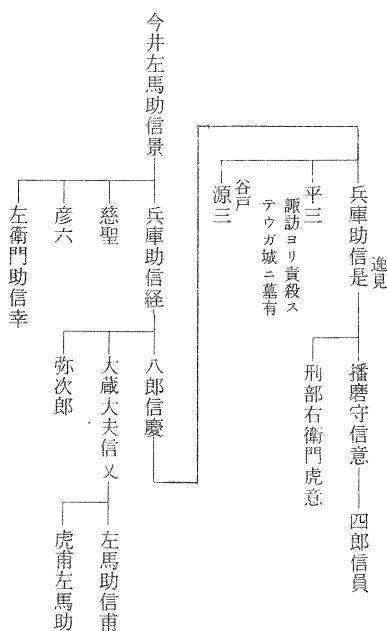
因みに、今井大藏大輔信父は『一蓮寺過去帳』によれば眼阿明応三年（一四九四）甲寅三月二十六日打死であり、与阿源三の永正六年己巳（一五〇九）十二月二十四日打死の十五年前になる。明応三年三月二十六日の合戦で武田信繩が弟の油川彦八郎信惠を破つてい（『妙法寺記』）。信父は信惠の側についていたと考えられる。

円光院武田氏系図

甲斐国志（人物部第七）



慈恩寺武田氏系図



『一蓮寺過去帳』延徳四壬子七月廿二日打死に極楽寺聰三郎がある。明応元年壬子（七月十九日改元）七月二十二日の武田信繩と信惠の兄弟の相尅に関して、前述の宣阿大津芸州（安芸守信清）。長阿大津弥七郎と同じ日、他の多くの士とともに打死している一人である。

極楽寺の地名は現在玉穂町極楽寺がある。甲府市高室から六百メートル南に接する。極楽寺の村名は極楽寺という寺名によるものであらうが、『国志』編纂の時にもその名の寺ではなく、「本村は蓋し佛刹に依て村名を得るか。然とも今其寺は見えず」といつてある。現存する安樂寺という寺との関係も明らかでない。

文明十八年三月一日 臨阿 極樂寺殿

と「殿」の字を付けてるので、武田氏の分流の一つと考えられるが、武田直系のどのあたりから分れたものか、從来見ることのできる系図では出て来ない。比較的武田氏直系に近い分れと思われるのであるが。

『一蓮寺過去帳』には、右の二のほか、  
(永享五力)七月十二日 声阿 極樂寺  
(寛正一一文明元) 珠阿 極樂寺南  
(文明八年)日付ナシ 淨阿 極樂寺門前  
文明十一年九月五日 滿阿 極樂寺門前逆修  
が見えるが、明確な年代の分らないものが多く、南・門前などと書かれているものは姓であるか否かも分らない。

極樂寺聰三郎は大津芸州とともに信惠側に立つて打死したものと推測される。この事件で大津氏も極樂寺氏も勢力を失つたものと考えられる。その後『一蓮寺過去帳』には極樂寺の名は出て来ない。しかし完全に亡んでしまつたとは考えられないのであつて、宮原(旧中巨摩郡大鎌田村宮原、現甲府市宮原町)の宇波刀神社に現蔵される獅子頭に関する伝説に極樂寺殿の名が現われる。

天文十五年正月、極樂寺殿が府中の武田晴信の館に年賀に出かけ途中、現在の二日市場の芝宮神の松の木に獅子頭がかかつているのを見て、晴信のもとに持参したという伝説(『甲府市史』別編)。民俗を参照のことであるが、極樂寺殿と宮原宇波刀神社の神主桜林氏の名が現われる。この伝説は慶長四年(1598)に宇波刀神社神主桜林氏が記した社記がもととなつておらず、天文十五年の桜林神主が慶長四年まで生存していて、自分の経験として記述されているので、獅子頭の件は事実あったことと考えられ、晴信が桜林氏・極樂寺氏ら

と相計つて晴信輩下の諸將士の士氣を鼓舞するために行なつた演出であったのではないかとも考えられる。櫻林神主の存在は勿論、この時代に極樂寺殿が実在したこと、この伝説から認めてよいのではないか。

明応元年に打死した極樂寺聰三郎のあと、その子孫に當る誰かが極樂寺の地に残つていたと考へてよいであろう。しかし、その後は『甲陽軍鑑』などの軍記物には極樂寺氏は出て来ない。ただし勝頼の近習衆に極樂寺孫介があるので、極樂寺氏は天正頃までも残つていることになる。

### 仁勝寺殿

諸系図に武田安芸守信満の子、武田刑部大輔信重の弟に仁勝寺(宗印)がある。一本武田系図は四男宗印仁勝寺とし、円光院武田系図は三男仁勝寺殿、慈恩寺武田系図も同様三男仁勝寺殿とする。

仁勝寺殿は『一蓮寺過去帳』によれば、昌阿仁勝寺永享五年四月十九日打死である。永享五年は癸丑、西暦一四三三年に當る。この時の打死は、

永享五年四月廿九日

量阿弥陀佛 匠作  
同日  
昌阿弥陀佛 仁勝寺  
性阿弥陀佛 河内  
同日  
時阿弥陀佛 鷹野

同日

立阿弥陀佛 柳沢

同日 長阿弥陀佛 長塚

同日

受阿弥陀佛 山寺

永享五年四月廿九日

徳阿弥陀佛 山県主計

永享五年四月廿九日

声阿弥陀佛 牧原

永享五年卯月廿九日

頓阿弥陀佛 林部

永享五年卯月廿九日

眼阿弥陀佛 吉田

などの名が見える。永享五年三月一日、信満の子武田信長が鎌倉府

より逐電して甲斐に帰り、四月二十九日、信長は武田一党と与党日

一揆を率いて、輪宝一揆と荒川で戦つて敗れたことが『鎌倉大草紙』

に見える。仁勝寺らが打死をしたのは、この荒川の戦いであろう。

なお、  
永享六年四月廿九日  
行阿弥陀佛（名欠）

同日

善阿弥陀佛 巨勢村

永享六年四月廿八日

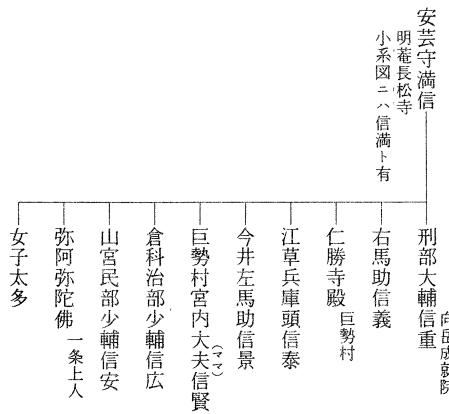
頬阿弥陀佛 山県

永享六年卯月廿八日

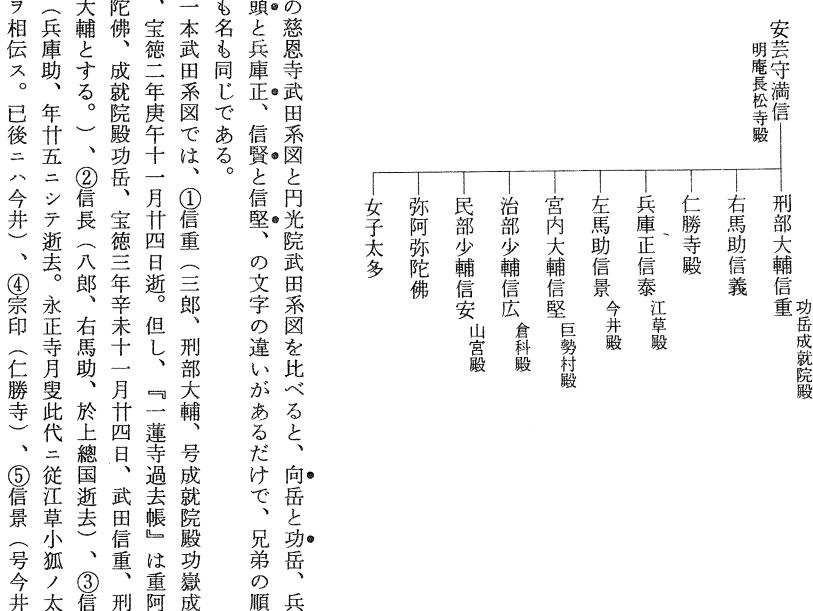
金阿弥陀佛 巨勢村

も『一蓮寺過去帳』にあり、丁度一年の差があるが、丁度一年後の  
この日に何か事件があつたのか。あるいはこれらの記載は一年の記  
し誤りで実は永享五年であるかも知れない。

### 慈恩寺武田系図



## 円光院武田系図



右の慈恩寺武田系図と円光院武田系図を比べると、向岳と功岳、兵庫頭と兵庫正、信賢と信堅、の文字の違いがあるだけで、兄弟の順序も名も同じである。

一本武田系図では、①信重（三郎、刑部大輔、号成就院殿功嶽成公、宝徳二年庚午十一月廿四日逝。但し、『一蓮寺過去帳』は重阿弥陀佛、成就院殿功岳、宝徳三年辛未十一月廿四日、武田信重、刑部大輔とする。）、②信長（八郎、右馬助、於上總国逝去）、③信康（兵庫助、年廿五ニシテ逝去。永正寺月叟此代ニ從江草小狐ノ太刀ヲ相伝ス。已後ニハ今井）、④宗印（仁勝寺）、⑤信景（号今井

孫六、左馬助）、⑥信賢（号巨勢村宮内大輔）、⑦信広（号倉科兵部少輔）、⑧信安（号山宮民部少輔）、⑨弥阿（号融山）、⑩女子（号草殿）、⑪仁勝寺宗印は右馬助信長に相当するものであつて、信長は永享五年四月二十九日輪宝一揆と荒川に戦った武田信長である。慈恩寺・円光院の武田系図では仁勝寺殿は右馬助信義の直ぐ弟、一本武田系図では仁勝寺宗印は右馬助信長のあと江草兵庫助信康を挟んでその弟となっている。仁勝寺宗印は兄信長に従つて荒川の戦に敗死したものとしてよい。

『一蓮寺過去帳』の同日打死に、量阿匠作・性阿河内・時阿鷹野・立阿柳沢・長阿長塚・受阿山寺、また永享五年四月廿九日徳阿山県主計、四月廿九日覚阿（名欠）永享五年四月廿九日声阿牧原、永享五年四月廿六日底阿（名欠）永享五年卯月廿九日頬阿林部、などが見え、右の匠作・河内・鷹野・柳沢・長塚・山寺など同日打死のものたちも信長の味方であつたのであらうか。

何れにしても巨勢村の仁勝寺宗印は兄弟に連る縁で兄右馬助信長に組して永享五年四月廿九日の荒川の合戦で打死したものと断定し得よい。

現在甲府市小瀬町（近世の山梨郡中郡筋小瀬村）の鳳堂山仁勝寺（臨済宗大黒坂村聖應寺末）は「開基武田右馬助信長、巨瀬宮内少輔信堅ノ墓ニ碑子ヲ建ツ」（『国志』）としているが、仁勝寺殿の墓と称するものは記されていない。開山は文明三辛卯（一四七二）十月十日寂の一音喝西堂であるという（『国志』）。

かかるに、『寺記』山梨郡中郡筋小瀬村鳳堂山仁勝寺の記載に、

### 巨勢村氏

「開基新羅三郎十一代右馬助信義公法名仁勝寺殿月水宗印大居士墓所有」之、大壇那同信義公弟宮内少輔信堅法名脱空甲居士墓所在。」としていて、仁勝寺殿宗印は武田右馬助信義の法名としている。円光院系図・慈恩寺系図の右馬助信義は一本武田系図などの武田右馬助信長に相当すると前に述べたが、武田信長は、永享五年

(一四三三) 四月の荒川の合戦で敗れたのち、駿河国に逃れ、永享十年(一四三八)十月の永享の乱には幕府軍として出陣し、足利持方と戦い、永享十二年(一四四〇)の結城合戦に武田信重らと共に幕府の命によって参戦し、翌嘉吉元年(一四五一)結城合戦の功により信長は曾比・千津島等を与えられ、宝徳元年(一四四九)足利持氏の子は許され元服して成氏と称し鎌倉公方となると、十月信長は鎌倉に入つた成氏に仕え、享徳三年(一四五四)十二月信長は成氏の命により鎌倉管領上杉憲忠の邸を急襲して憲忠を討ち、康正二年(一四五六)正月、信長は一族とともに上総国に入つて、真里谷・序南の二城に拠つた、などと伝えられているので、永享五年四月廿九日に打死の仁勝寺殿は武田右馬助信長ではない。『寺記』にいう武田右馬助信義は信長とは別人であつて、円光院系図・慈恩寺系図は、一本武田系図などの記す如く、①刑部大輔信重、②右馬助信長とし、その次に③右馬助信義(法名仁勝寺殿宗印)とすべきところを、右馬助信長を記し落し、右馬助信義と仁勝寺殿を二人に分けてしまつたのはなかろうかという疑問も生れてくる。他の史料によつて検討が進められなければならない。

なお、『国志』にいう開基右馬助信長の墓は、『寺記』に記すのが正しく、右馬助信義の墓と改めるべきかも知れない。

前項の仁勝寺殿の仁勝寺は小瀬村にあるが、小瀬村を姓とする家が仁勝寺殿の兄弟に、巨勢村宮内大輔信賢(信堅)がある。一本武田系図も円光院・慈恩寺・武田系図も安芸守信満(満信)の六男としている。『一蓮寺過去帳』の

延徳元年七月十二日 師阿弥陀佛 巨勢村宮内大輔

と見えるのが信賢と見てよい。延徳元年己酉は西暦一四八九年に当り、長享三年八月二十一日に改元して延徳元年となるから、七月十二日はまだ長享三年である。

しかし、『一蓮寺過去帳』に見える巨勢村(小瀬村・コセ村)はすでに応安三年(一三七〇)にあり、永享・宝徳・享徳・文明の時代にも見られるのである。即ち、

応安三年五月廿四日 文阿 巨勢村  
永享六年四月廿八日 善阿 巨勢村  
永享六年卯月廿八日 金阿 巨勢村  
(永享十力)  
(一三七〇)  
宝徳二年五月廿三日 陵阿 小瀬村  
享徳三十一年頃 本阿 巨勢村

文明九年八月九日 光阿 巨勢村逆修  
延徳四年正月一日 重阿 巨勢司農  
(一四八九)  
(一四九三)  
延徳四年壬子七月廿二日打死 與阿 コセ村式部丞

と巨勢村の名で見えるのは、  
と巨勢村宮内大輔(信賢)は古くからある  
巨勢村の姓を継承したものと考えられる。師阿巨勢村宮内大輔のあ

同 喜阿 同源三郎  
(<sup>四九四</sup>四九四) 三甲寅二月時正 明応

三月廿六日打死 陵阿 コセ村了香  
(<sup>五五五</sup>五五五) 五戊辰八月廿九日 宗満禪門 コセ村  
(<sup>五五五</sup>五五五) 辛丑五月廿五日 蓮阿 小瀬村

などがある。

延徳四年壬子七月廿二日の與阿コセ村式部丞・善阿同源三郎の打

死は、前記の大津芸州・大津弥七郎、山宮右近助ほか同姓三名、極

樂寺聰三郎、井上・河崎などと同時に打死である。武田信繩・信恵

兄弟相剋に關係する合戦の打死である。また明応三甲寅三月廿六日

打死のコセ村信意は武田信繩が弟信恵を破つた戦いにおいてであり、

この日の打死として、眼阿大藏大輔(今井信父)、与阿加藤兵部少

輔殿、底阿近山、教阿後屋対馬殿、純阿塙田右京進らの名も『一蓮

寺過去帳』に残されている。延徳四年(明応元年)・明応三年の両

合戦共、巨勢村の人々は信恵側についていたものと思われる。

同じ年の正月二日重阿巨勢司農も一族としてよいが、信賢の子に

當る人物であろうか。

なお、小瀬村のうちにある天津司宮の社記には「大永二年壬午武

田民部少輔信乘修造、閏八月二十七日の成就」と棟札に記されてい

ると述べているが、信乗は信賢の子孫であろう。

『一蓮寺過去帳』の天文辛丑二月廿五日蓮阿小瀬村というのが信

乗であろうか。

小河原氏

『一蓮寺過去帳』には小河原が多く現われている。

(康永元カ(壬申一三四二)) 七月七日 金阿弥陀佛 小河原

(寛正二年頃) 弥阿弥陀佛 小河原豊州

(寛正二年文明元) 連阿弥陀佛 小河原

(同右) 善阿弥陀佛 小河原

(同右) 珠阿弥陀佛 小河原中書

(文明元! 文明五) 善阿弥陀佛 小河原

(文明五年癸巳三月十九日) 見阿弥陀佛 小河原

(文明五年癸巳十一月廿六日) 与阿弥陀佛 小河原四郎右衛門

(同日 底阿弥陀佛 小河原文五郎)

(文明九年十月六日) 連阿弥陀佛 小河原伯耆

(文明十六年十二月四日) 直阿弥陀佛 小河原逆修

(<sup>五月廿五日後元</sup>長享三年八月廿七日) 声阿弥陀佛 小河原

(延徳二年) 日付ナシ 乘阿弥陀佛 小河原

(延徳三辛亥九月十六日) 吉阿弥陀佛 逆修小河原

(明応三甲寅頃) 日付ナシ 與阿弥陀佛 小河原

(永正五戊辰十月廿四日) 成阿弥陀佛 小河原 相当七年

永正五戊辰十二月五日 来阿弥陀佛 小河原左京進

右のうち弥阿弥陀佛小河原豊州は文阿弥陀佛大津と同日になつて

いるし、文明五年十一月廿六日には與阿弥陀佛小河原四郎右衛門と

底阿小河原文五郎は獨阿今井又三郎・頤阿河村左衛門三郎らと同日

になつてるので、それそれ何か事件があつたのではないかと思わ

れるが、今のところ明らかにしうるものはない。

右の如く小河原を姓とすると思われるものが多いため、それぞれの

系譜關係は不明であるし、また小河原の地に勢力をもつた豪族と思

われ、あるいは武田氏の系譜を引くものと予想されるが、武田氏の

どこに系譜を引くのかも明らかでない。

上小河原村の熊野神社社記には「武田太郎信義造替、正慶中高畠

太郎次郎時盛修造、明応之頃再建地頭武田八郎信惠奉行ト上梁文写

御座候」とあって、同社は古くから武田氏と関係があつたが、信惠

が奉行として再建したということは当地域の士が信惠と深く結びつ

いていたことを推測させる。あるいは信惠が、明応元年・明応三年

に武田信繩と争った中で、小河原の士も勢力を失つてゆくと見られ

る。『甲斐国志』人物部第七小河原氏の項には「今小河原村三村ニ

分處ス。氏族ヲ伝ル者ナン」と、述べ、同書土庶部第八には上小河

原村に島田左衛門の項を設け、「其先伊勢守某、駿州島田某ノ女ヲ

娶リ遂ニ其姓ヲ冒シ享禄ノ頃ヨリ武田家ニ属セリ。……」と記して

いる。島田氏の先祖、伊勢守某が小河原氏の系統であるか否かは今

のところ不明である。

右の外、現在甲府市を含む甲府盆地周辺を地盤とした豪族として、

小曲氏、堀内氏、高室氏、鎌田氏、後屋氏、板垣氏、下条氏、など

が見られる。板垣氏のことは別に詳細な報告が必要であるが『一蓮

寺過去帳』により中世室町戦国初期の名を拾うと次の如くである。

### 小曲氏

文明元年十月三日の一行あと力阿 小曲

見阿 小曲赤次郎

文明六年甲午閏五月十六日 清阿 小曲

明応十辛酉二月廿七日 与阿 小曲美濃

堀内氏

(四八二、壬寅) 文明十四年六月十四日 文阿 堀内藤四郎逆修

文龜二王戌二月廿六日死去

明応三年甲寅三月廿六日打死 光阿 堀内源二郎

明応七年戊午拾月九日 成阿 堀内

文龜元辛酉六月卅日 勢阿 堀内

永正八年未正月十五日 光阿 堀内弥三

高室氏

(永享六カ) 九月四日 道阿 高室

鎌田氏

(嘉吉元年カ) 日付ナン 能阿 鎌田

(宝徳二年カ) 正月七日 来阿 鎌田

後屋氏

明応三年甲寅三月廿六日打死 教阿 後屋対馬殿

この後屋対馬殿も武田氏の一族と思われるが、系譜関係は不明で

ある。この日武田油川彦八郎信惠が兄武田信繩と戦つて敗れ、信惠

に味方したものに眼阿今井大蔵大輔信父、念阿コセ村信意、与阿加

藤兵部少輔・光阿堀内源二郎・純阿塩田右京進などの多くの武士が

あり、後屋対馬守も信惠に味方して打死したものと見てよい。

### あとがき

以上の如き地名を姓とした諸家は、武田氏惣領家の藩屏として、

地域々々に勢力を張つたが、室町・戦国時代の度重なる諸合戦の中

で討死を遂げ、勢力を失つたものもある。殊に武田信繩・信恵の

相剋に参加して討死をしたものが多く、その後、武田信虎の甲斐

統一の中滅亡したものもあるし、武田氏の家臣になつたものもあつ

て、戦国大名武田信玄の代には多くはその存在が小さくなつてゐる。